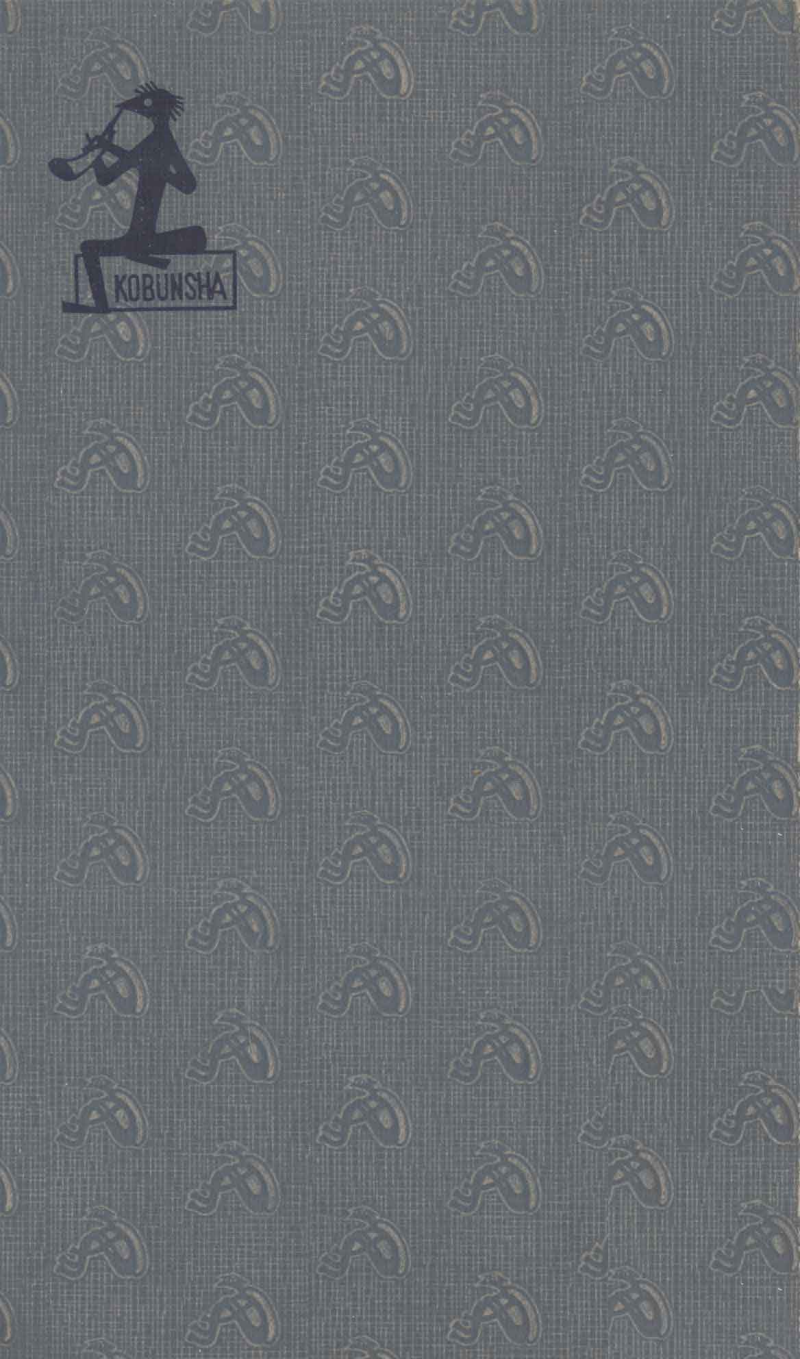




読者へのお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このつきには、どんな本を読みたいとお考えですか。この本には一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には御職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一九

光文社出版局

神吉晴夫

長編推理小説 ゼロの焦点

昭和34年12月25日 初版発行

昭和36年4月15日 41版発行

¥ 200

著者 まつもと せい ちよう
松本清張
東京都練馬区上石神井 1-682

発行者 神吉晴夫

印刷者 山元正宜
東京都文京区柳町26・三晃印刷

発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。

【藤田製本】

表紙の模様・意匠登録 116613

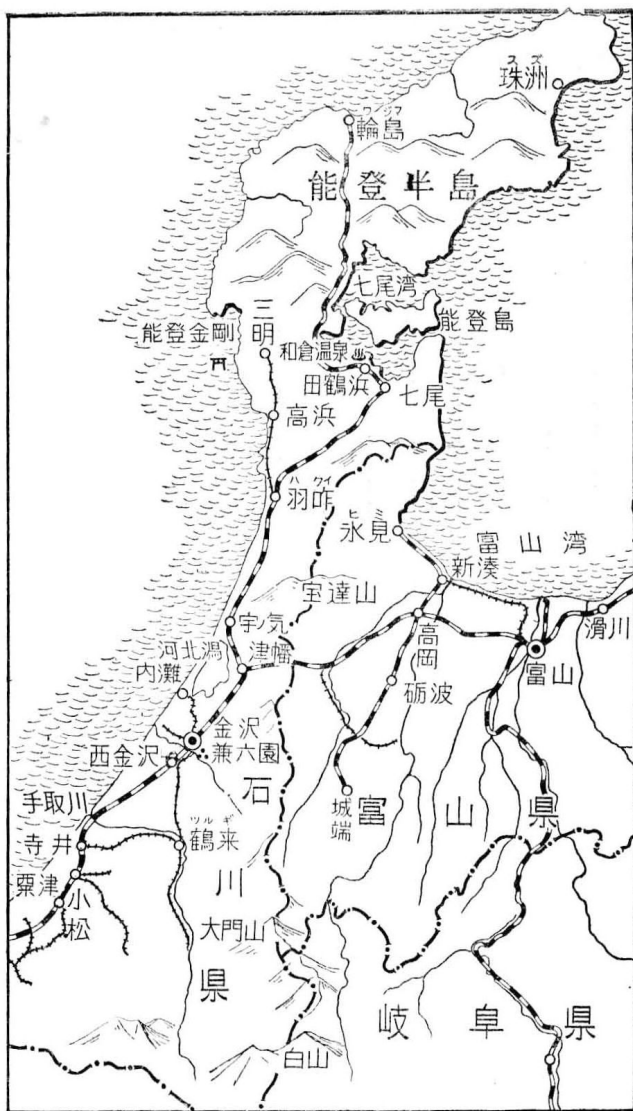
© Seityô Matumoto 1959

ゼロの焦点

松本清張

目次

ある夫	五
失踪	一九
北の疑惑	四二
地方名士	六三
海沿いの墓場	七五
義兄の行動	九三
前歴	一〇七
毒死者	一二三
北陸鉄道	一三〇
逃亡	一五六
夫の意味	一六七
雪国の不安	一八八
ゼロの焦点	二三四





夜の上野駅

ある夫

1

板根^{いたねていこ}禎子は、秋に、すすめる人があつて鵜原^{うはらけんいち}憲一と結婚した。

禎子は二十六歳であつた。相手の鵜原は三十六歳だつた。年齢の組合せは適切だが、世間的にみると、多少おそい感じがした。

「三十六まで独身だというと、今まで何かあつたのじゃないかねえ。」

その縁談があつたとき、禎子の母は一番、それを氣にした。

それはあつたかもしれない。三十六までまるきり女との情事がなかつたとは言いきれない。まったくなかつたと聞かされたら嘘^{うそ}のようだし、男としてかえってひ弱な

感じがする。長い間勤めに出ていて、男の働く世界に身を置いてきた禎子はそう思った。実際、女にまるきり交渉のない男というのは、どこか軽蔑してもいいようなところをもっていた。もっていたというよりも、女が感覚で発見するのかもしれない。そんな男に清潔感というのは、滅多になかった。身体の上でも、仕事の上でも、ある虚弱さを感じるのだ。

禎子は、相手の男にそんな女関係の過去があってもいいと思った。誰かと一時期、同棲したことがあると聞く嫌だが、それでも現在がまったくそれから切り放されていれば咎めるにあたらないと思う。要するに、過去が後腐れなく捨ててあれば、それでよかった。

禎子をもっと若かったらそうは思わなかったに違いない。それから彼女に今まで恋愛めいた経験が二三度なかつたら、もっと結婚相手に、峻厳な主義をもったであろう。年齢と多少の経験が、彼女に寛大と成長を遂げさせていたといえそうである。

禎子は、会社では、女の子できれいだと言われる組にはいつていた。そんな評価は、女の友だちの間では多少

の意地悪さで告げられたし、男は、もっと部分の特徴を具体的にあげてほめた。

恋愛は、ふしぎに成就しなかった。途中で禎子の方からしりごみして手を引っこめるのだった。彼女が踏みきれなかったのは、相手が十分な男でなかったともいえるし、彼女に臆病なものがあつたともいえる。それなのに、ほかから縁談があつたときは、たまたまその恋愛らしい気持が進行している時だったりして、それにかかずって断わつた。何もない時は、縁談に気持が乗らなかつたりして、持ちだされる話は切れずにあるのだが、妙に密着のない状態で来た。

そのとき、鵜原憲一との縁談が起こつた。

鵜原はA広告社の北陸地方の出張所主任ということであつた。仲人は禎子の亡父の友人で、A社に関係のある佐伯さんという人だつた。

A社は広告取次業として、東京では有名な業者だと仲人は言つた。禎子も母も、広告取次業とは、どのような業種か、さだかな知識はなかつた。

佐伯氏は、新聞を広げて、禎子と母に見せた。

「ほら、こういう広告がいっぱい新聞に載^のっているでしょう。新聞社の経営は、やすい購読料ではとてもまかたつてはゆけないのでこういう広告収入で経費を出すのです。新聞社はいろいろな事情から、直接に広告主と取引しないで、間に代理店^{エージェンツ}を置いているのです。それが広告取次業ですよ。」

佐伯氏は説明した。

「日本で一番大きいのはD社ですが、これは、新聞のほか、雑誌、ラジオ、テレビなどの広告も扱^けって桁^{けた}はずれです。A社は新聞だけですが、扱い高は二番か三番でしょう。社員も地方をあわせて三百人ぐらいいます。とにかく、業界では、一流ですよ。鶴原君はその社の北陸方面の出張所主任です。たいへん有望な、おとなしい男ですよ。」

鶴原憲一の職業はだいたい分かった。素人^{しらひと}には、電気器具の販売とか、薬品の製造のようにはっきりとのみこめないが、およその察しはついた。

学歴は大学中退だった。中退という事情は戦争が起こつたためたと佐伯氏は言つた。戦争が終わつて二年後に

中国から還^{かえ}つてきた。それから二三の職業を経て、現在のA社にはいったのは六年前である。

「六年で、ともかく、地方出張所の主任になる男ですから、優秀ですよ。事務所は金沢^{かなざわ}ですがね。」

仲人は重ねてほめた。

「そうすると、結婚しても、なんですか、その金沢に居住しなければならぬわけですね？」

母はきいた。

「いや、その必要はないでしょう。鶴原君は今でも月に十日ぐらゐは東京に帰ってきます。東京にも仕事があるのですよ。つまり、北陸地方に工場をもっている会社は、ほとんど東京に本社がありますから、そこに仕事の交渉に来なければならぬのです。それと、本店との連絡をかねて東京に帰るのです。ですから本人は家庭をもつても、東京にしたいと言っています。」

佐伯氏は言つた。

「でも、月のうち、二十日^{はつか}も主人が出張してたんじゃ留守^すのほうが多うございますね。」

母はそれを氣にかけた。

「いや、それは近々、鵜原君を金沢から呼びかえすようになっているんですよ。もう二年になりますからね、彼が金沢に行つてから。これまで二三回、呼び戻して本店勤めにする話はあったんですが、本人が、その都度、待ってくれと言うので、のびてきたのです。」

「どういうわけでしょう？」

「商売のことになりますが、はっきり言いますとね、北陸地方は田舎だから、めぼしい広告主もなく、たいした仕事がないですよ。それをもう少しなんとかしたいというのが鵜原君の希望でしてね。せっかく、その地方を担当したのだから成績を少しでもあげて帰りたいのが人情でしょうね。実際、彼はそのとおりに努力して、成績もわずかながらだんだんにあがっているのです。」

佐伯氏はまた説明した。

「ですから、鵜原君は今度、本店のほうで呼びかえしてくれるのなら、結婚を機会に東京に帰りたいと言っています。主人の出張で留守が多いといっても、当分の間です。」

佐伯氏は、母の傍にらんで話を聞いている禎子にそ

う言つて笑いかけた。――

見合ひは、定式どおりに、歌舞伎座で行なつたが、そのとき背の低い佐伯氏に連れられてきた鵜原憲一は、上背があつて均斉のとれた身体つきをしていた。三十六歳といつても、独身だからもつと若やいでみえると禎子は想像していたが、想像よりは老けていた。顴骨が少し高いせいかもしれない。しかし、虚心に見れば、色の浅黒い彼の容貌は、三十六歳以上でも以下でもない印象であつた。

はじめて見る鵜原憲一は、あまり澁刺とは言いがたかつた。落ちついているというよりも、沈重な感じがした。だが、それだけともいえない、まるでそれを裏切るような明かるさが、彼の表情に、ときどき、はつとすくらしい浮かび出るのだった。禎子は鵜原憲一の複雑さをなんとなく直感した。

食事をしながら、禎子の母は、

「金沢って、いいところでございましょうね。わたしは一度も行つたことはございませんが。」

と、鵜原憲一に問いかけた。

「いや、つまらんとくろです。年じゆう、暗いような感じがして重苦しい所です。」

鵜原の答え方は、仕事だから仕方なく辛抱しているのだと言ってるようだった。フォークとナイフを動かして皿に目を落としてゐる彼の眉のあたりには、実際、北陸の空気をもってきたような憂鬱さが見えた。

楨子は、この縁談を承諾すると、それまで勤めていた会社を辞めた。

2

結婚式は十一月の半ばに挙げた。

その期間だけ、鵜原憲一は勤め先の会社から一週間の休暇をもらった。T会館の披露の宴席には、社の重役で営業部長を兼ねている人が来てくれて祝辞を言った。

「——鵜原君は有能な青年でわが社がもっとも期待をかけている一人です。こう申しあげると型どおりの祝辞に思われるかも知れませんが、あとを聞いていただきとうございます。私はともかくも、鵜原君の上役であります。上役がみなさまの前でこう申す以上、鵜原君の月給

があがるのを保証したようなものでございます。奥さまはどうぞご安心願います。私が型どおりの祝辞だけを申しあげていないゆえんであります。」

こう言つて客たちを微笑させた。

「新婦の方には、本夕、はじめて、お目にかかりました、失礼ながら、なかなか理知的で美しいのには驚嘆いたしました。鵜原君が三十六歳の今日まで、あらゆる誘惑、……があつたかどうか、詳しくはそんじませんが、今日の日あるを期して、辛抱して待った理由が、分かるようでございます。ご承知のように、わが社の業態は、広告主を説得してなんとか出稿させることであります。これは、なかなか忍耐を要する仕事でありまして、鵜原君がこのお美しい夫人を得られる機会のため、今日まで独身を忍耐されたことは、わが社の仕事の影響であらうかとひそかに自負しているものでございます。」

客たちは笑いながら聞いていた。うつむいている楨子の耳にも、それははいった。普通のこういう席に慣れた人の祝辞として、ぼんやり聞いていたのだが、ずっと後になって、別の意味で思いだされる言葉になった。

鵜原憲一には両親が死んで、なく、青山に兄弟夫婦がいた。兄はまるきり違った顔をしていて、まるく肥えていた。商事会社の課長ということだったが、酒飲みで童顔であった。妻は——つまり禎子の嫂になる人は、痩せて、まなじりがいくぶんつりあがっていた。顴骨の出ているところは、このほうが鵜原憲一と姉弟のように思い違いされそうだった。

鵜原は、今まで青山の兄弟夫婦の家にいたが、禎子と結婚するために、渋谷の新しいアパートを借りた。高台にあつて、窓からは、東京の町が海のように沈んで見渡せた。灯のある夜景はことに美しかった。

縁談が決まつてから、挙式までの期間が少なかったせいか、禎子は鵜原憲一と二人きりで会つて歩く日は一度もなかった。もつとも、それをしようにも、鵜原はたいてい金沢の方に行つていて、東京にはいなかった。禎子は、結婚前の交際ということに以前ほどの憧憬は持つていなかったし、鵜原からも希望がなかった。禎子は、見合いの席で瞥見した鵜原憲一に満足していた。

それは積極的に好きになつた、という感情には距離が

あつた。第一、鵜原憲一について禎子に分からないところがたくさんあつた。かういうところに勤めていて、こんな仕事をしていて、兄弟夫婦と同じ家にいた——そのこと以外になんにも分かつていないのだ。だが、そういう概念だけで、なんとなく鵜原憲一が理解できそうであつた。単に鵜原だけではない、結婚する相手というものは、そんながい、そんな茫漠とした理解のもとに結ばれるのではなからうか。女は、相手のその未知におそれと、魅惑を感じるのだ。そうして結婚した後は、未知の部分はしだいに正体が知れてきて、恐怖は去り、魅惑は平凡化してしまふのであらう。禎子はそう考えていた。

禎子が、新婚旅行の行先について、北陸を希望したのは、鵜原憲一の未知の一部分をすでに知りたいという欲望が動いた結果かもしれない。鵜原憲一は、北陸で働いている。たしかにその土地を通過してみたい衝動があつた。暗鬱な空と、荒い波があると聞かされている北の海の想像の中には、その意識がひそんでいた。

それに対して、仲人の佐伯氏は、鵜原憲一の希望として、なるべく熱海か箱根、遠くて関西あたりにしたい旨

を伝えてきた。

「当人がね、北陸の方はどうも気がすまないと云うのです。いつも見つけているせいでしょね。せっかくだから、もっと花やかなところがいいと言うんですよ。」

それを聞くと禎子は、なぜか鵜原憲一の眉のあたりに見た、憂鬱な北の国の翳りのようなものを思ひだした。

しかし、禎子は押し返した。箱根や関西では気がすまなかった。それではというので、信州から木曾にまわり、名古屋へ出て帰京する案を望んだ。折から、秋で、紅葉の盛りである。

このような小さな紛争はあったが、とにかくご披露がすむと、その席から、予定どおり新宿駅発の二等車に乗った。

甲府に着いたのは夜がおそかった。駅に、連絡してあった旅館の番頭が、提灯をもって出迎えていた。

番頭は、待たせてある車を呼んで、二人を乗せ、ドアを外からしめて、おじぎをした。禎子はこの番頭によって、自分が人生の岐路に突きやられたように思った。

旅館は湯村にあった。昼なら、富士山が正面にあると

いう広い庭のある部屋に通された。暗くて、近くの芝生と石が見えるだけであった。

鵜原憲一は、女中が去ると、禎子に近づいて初めて頸を腕ではさんで唇を吸った。それまで、汽車の中でも、ひどく落ちついて大人びていた鵜原が、急に若々しい情熱を見せた。

「女中が、すぐ来ますわ。」

禎子は、いつまでも放そうとしない鵜原の唇をのがれて言った。実際に女中が来たとき、鵜原は荒い息をしずめるように縁側のソファーの方へ歩いていった。

風呂の案内を知らせにきたとき、禎子は別々にはいると主張した。

「どうして？」

鵜原が、半分、おそれるようにきいた。

「今度だけよ。」

禎子は、女中が、襖の陰で聞き耳を立てていそうなので、細い声で言った。腫がきれいだと言われて、その特徴の、下から見あげるような癖をつい出してしまった。

夜、おそくまで旅館のホールではレコードが鳴っている

た。禎子は、あまり気のすまなそうな鵜原を誘ってホールに行った。若い、二十三の、会社の団体客のような数組の男女が、テンポの速い曲を踊っていた。

禎子は、壁に立ってしばらく見ていたが、鵜原に微笑して言った。

「踊りましょうか。」

鵜原は思ったよりは上手であった。禎子は次々と曲の変わるごとに彼と踊りながら、自分が無意識のうちにある時間をのぼしていることに気づいた。

禎子は、はじめて涙がにじんだ。

朝、食事をすませると、午前中は、車で昇仙峽に行つた。紅葉見物でひどい人出であつた。せまい道を車が自由にすまなかつた。

鵜原憲一は、昨日と少しも変わりはなかつた。三十六歳相応の顔に沈静がただよい、身の動作に落ちつきがあつた。そのかぎりでは変化はなかつた。禎子は、しかし、彼が昨日までの鵜原憲一でない部分を知っていた。一夜で、未知の一角が崩れた。それは禎子と同じかもしれない。

い。ただ、それによって、大部分を知つたつもりでいる危険は、女より男の側かも知らなかつた。その証拠に、たいていの男は、安堵した顔つきになるものだ。

鵜原憲一も、禎子に安心したような表情をみせた。なんの安心であろう？ 禎子の身体に過去がなかつたことを確かめえた安心であろうか。彼の表情には、夫としての場所がしだいにひろがりつつあつた。見かけは、昨日の鵜原憲一に違いはなかつたが、その落ちつきには夫の傲りが出ていた。

「昇仙峽は初めてですか？」

鵜原は、溪流の上にさし出ている紅葉に目をやりながら禎子へいたわるように言つた。

「ええ。」

禎子がうなずくと、

「そうですか、そりゃ、よかつた。」

と夫は満足そうに微笑つてうなずいた。

こういう子供へでも向かつているようなものの言い方は、以前の禎子なら激しく嫌悪するところだった。今は——いや、今でも反発はあつたが、それは夫のかえつて

子供らしい傲慢さを許容で抑えていた。それは、いつのまにか禎子が妻になつてゐることなのだ。そこにもし、ある甘えが動いているのを意識したら、もはや、新しい夫婦は最初の感情の慣れあいをはじめたのであつた。

甲府を午後に出発した。右手の窓に八ヶ岳の長い裾野がゆつくりと動いた。鵜原憲一は肘を窓枠にもたせ、外を眺めていた。ここまで来ると外はいっそうに枯れ、林に落葉が進んでいた。鵜原の横顔は顴骨が目立ち、まなじりのあたりに細い皺が疲れたようにあつた。そうだ、この人は三十六歳なのだ。禎子は思った。

いくら長らく親しくしていても、恋人の目と、夫婦の目は違うものなのだ。禎子は、いまどのような目つきをして自分が鵜原を凝視していたかに気づいた。知らない間に、身体から変質してきたかと思うところになった。

鵜原は、目を返して見て、

「なんだね？」

と言つた。自分が彼女から見られたのに気づいたような言い方であつた。

「いいえ。」

禎子は頬をあかくした。なんだね、という口吻に昨夜の意味がこめられてゐるように思えた。

汽車は信濃境を越え、富士見のあたりを速力を出して走つてゐた。高原の傾斜に、赤や青の屋根と白い壁の家が建ちならんでゐた。

「きれい。」

と禎子は、小さく言つた。

鵜原はちらりとその方を見たが、すぐ膝の上に横に折つた週刊誌をひろげた。が、それを読むでもなく、ほかのことを考えてゐるふうであつた。

彼は、しばらくして週刊誌をもとに置くと、決心したように、禎子に向かつて言つた。

「君は、この旅行を北陸方面にしたかったそうだね？」
くわえた煙草に火をつけ、その煙がしみたように目を眩しそうにしてきいた。

「ええ。」

禎子はうなずいた。

「わがままだったのでしょうか。あちらの方を一度、見たかったものですから。」

「向こうは、これほどきれいではないよ。」

禎子がほめた富士見高原の景色に比較して言っているようだった。鵜原は、その言葉のあとで煙を吐いた。彼の言い方には、拒絶めいた響きがあった。いかにも見なれて飽き飽きしているから、そんな所はごめんだ、と言いたそうであった。彼が吐いた煙は、窓につきあたり、ガラスをはいあがつて立ち迷った。ガラスは曇った景色を流した。

禎子は、鵜原がなぜそれほど北陸を毛嫌いするのであろうかと考えてみた。しかし、それは納得できないことでもない。自分が日ごろ職場としてゐる地方に新婚旅行でもないものだという気持ちであろう。鵜原は二年もそこにいるのだ。月のうち二十日が金沢、十日が東京だった。これでは、まるで、金沢に土着しているようなものだった。鵜原が新婚旅行を別な所を選びたい理由は分かりそうであった。たとえ箱根や熱海や関西が月なみでつまらないにせよ、もの寂しげな北陸の景色の反動として理解できそうであった。

だが、夫の仕事している土地を見たいという妻の希望

を、鵜原憲一は考慮して、いや、考慮というよりも、なぜ、喜ばないのであろうか。まったくそのことを意識から塞いでみえる彼が、急に距離遠く思われた。

「君は都会に育ったから、北陸という暗鬱な幻像にあらがれているんだね。」

禎子の不機嫌な表情に気がついたのであろう、鵜原憲一は、唇に微笑を浮かべて、さしのそくようにして、言った。

「しかし、詩情なら、この信濃や木曾の山国が多いと思うんだがな。まあ、北陸の方はいつでも行ける。この次のことにしよう、ね。」

鵜原は妻をなだめるように言った。禎子は、子供のとき、母にねだって別な品を貰い、すかされた時を思い出した。

左手に諏訪湖のひろがりが見えたとき、鵜原は立って網棚から二人分の荷物をおろしはじめた。禎子が手を伸ばそうとすると、

「いいよ。」

と鵜原は、両手にさげた。

「すみません。」

禎子は言った。それは今のわがままも詫^わびているつもりであったが、鵜原に通じたかどうか分からなかった。実際、わがままと突感するのにはまだ間隔があったが、そう考える自分がいとしくもあった。

上諏訪^{かみすわ}の駅にも、旅館の番頭が迎えに来ていた。

「お車になさいますか？ 歩いてても七八分ですが。」

番頭は荷物を受けとってきいた。

「そうだね、歩いてても近いが、荷物があるから、まあ車にしよう。」

鵜原は答えた。前に来たことのあるような言い方であった。

宿は湖畔から少し離れていた。窓の障子を開いても湖は見えず、狭い庭が鼻先にあった。庭は塀で仕切られ、隣は別な旅館であった。湖が見えるものと思っていた禎子は少し失望した。

「みなさんがそうおっしゃいます。ほんとにここから湖水が見えるのでしょうか？ ございますがね。」

茶を注ぎながら、女中が言った。部屋は、いい室であった。

「じゃ、あとで湖の方へ出て歩いてみよう。」

鵜原が言った。

女中が部屋を出ると、鵜原は禎子がすわっている横に来て屈^かみ、接吻した。唇が厚くて堅かったが、鵜原の吸いかたは、激しかった。それは昨夜の経験と同じであった。禎子は身体が倒れそうなので困り、片手を畳の上に支えた。それでも鵜原はやめなかった。

禎子に、今まで恋愛めいた経験がないでもない。が、男の身体がこのように圧倒してくるのは、初めてであった。鵜原が解放された外では落ちついた様子でいるだけに、密閉された世界での所業は禎子をうろたえさせた。彼女は、夫がやはり三十六歳という男の年齢であることを考えずにはいられなかった。それとも、身体の愛というものはこのように激しいものであるうか。彼女には見当がつかなかった。しかし、それがうれしくない理由はなかった。――

たそがれが近づいていて、湖面の水の色は、沈んでい